

伝説と生きる^{うのとり}鵜鳥神社

源義経が参拝した？あの人気縁結び神社のルーツ？
時代とともに寺院神社の形式を変えながら、いまに続く普代の神社。



上：三陸沿岸の信仰を集めた鵜鳥神社
左：樹齢500年といわれる夫婦杉
右：鵜鳥神社の遙拝殿

縁結びスポットの元祖？

かつて修験者たちが修行した鵜鳥神社

卯子西山にある鵜鳥神社は、もともとは修験者の修験霊場であったそうです。現在は、鵜茅葺不合命(うがやぶさあえずのみこと)、海神命(わだつみのみこと)、玉依姫命(たまよりひめのみこと)、の3柱の神々を祀っています。

平安の初め、延暦23年(804)に卯子西山薬師寺として、あるいは大同2年(807)年に卯子西大明神として創建されたと伝えられています。地元沿岸では「うねどり様」と呼ばれ、沿岸地域の深い信仰を集めていました。名前が「鵜鳥神社」となったのは明治時代のこと。明治新政府による神仏分離令までは「卯子西神社」として、卯年の守り本尊、文殊菩薩・子年の千手観音・酉年の不動明王を祀っていました。実はいま恋愛成就のパワースポットとして注目されている、遠野で人気のあの卯子西神社の本来本元

なのです。赤い布ではなく、境内の松の枝を男性が左手で、女性が右手で結び合わせ、枯れずに成長すると願いが叶うとされています。いにしえびとたちが結んだ枝がぼこりと丸くこぶのようになっているのがわかります。

神社に残る義経伝説

この神社の春の例大祭の始まりに源義経伝説がからんでいます。北方伝説に基づく蝦夷地を目指した義経が、金色の鵜が子育てをしているのを見て、神鳥であると7日7夜、海上安全と武運長久を祈りました。すると「汝の願いを聞きとどけよう」と神様のお告げがあり、感謝した義経が卯子西大明神をまつり、翌年から4月8日を祭典としたということです。



いにしえを伝える

県の無形民俗文化財・鵜鳥神楽

例大祭で激しく鮮やかに舞う鵜鳥神楽は、鎌倉時代に始まったとされる山伏神楽の形を受け継いでいます。正月、神社のある鳥居地区の公民館をスタートに、沿岸の市町村を回る「陸中沿岸地方の廻り神楽」です。宮古市の黒森神社の黒森神楽とは「北の鵜鳥、南の黒森」と呼ばれ、隔年交互に釜石白浜・室浜までの南回り、久慈久喜までの北回りを行っています。平成7年に国の「記

録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財」、平成23年に岩手県民俗無形文化財に指定されました。海の神楽らしく早いテンポで舞われる舞の数々、そして観客との間合いで繰り広げられるユーモラスな演出が見る人を魅了しています。「山の神舞」「恵比寿舞」「岩戸開」「榊葉」など全53演目あるこの神楽は、いまなお多くの人々に大切にされている神楽です。

ふだいの新しい伝統芸能も受け継がれている。



中野流鵜鳥七頭舞

普代中で受け継がれる、鵜鳥神楽を基本にして、岩泉町小本の中野地区に伝わる神楽を取り入れた舞。若い中学生が演じるだけに、飛び跳ねる、回るなど所作がダイナミック。躍動感あふれる舞が人々を魅了します。ふだいまつりなどで披露されています。



ふだい荒磯太鼓

平成5年に誕生した「ふだい荒磯太鼓」は、海の怒涛のような勇ましい太鼓の響きで、自然と共生する人々の命の叫びを表現した創作太鼓です。10月に太田名部漁港で開催される海フェスタinふだいの他、村内外のイベントなどで披露されています。